

です。またもう一つ、話のよく出来る人ばかりがやってしまう、ということもあります。

これらは先生の指導に加えて、子ども自身のものからの経験と年令で解決していける。

(四才児)

劇あそびへの一過程

幼稚園における言語指導

幼児期における言語発達は著しいものがある。が、それは自己中心的であり、相手を意識することが少ないのが、幼稚園という一つの集団の中で、だんだんに社会的な働きを持つようになるとしむけることが、この時期の言語指導の一つの大きな要素となっているのではないかと考えた。

四才児、それも六月に研究会を持つのであるから、ごくはじめの時期である。幼稚園の生活では、小学校のように学科学位に学習するという性質のものではない。

ることとは思いますが、現在の年令では、自分から話をするということ、聞くことと目方にかけて場合、前者の方に重みがあると思えますので、後者の方はこれからの課題としておきます。

関 治 子

いのであるから、言語指導といっても、その場はきわめて広大であると思う。個人差も大きい、自由の会話や遊びの中で、個人の指導も教師の意図で、よい指導の場を構成することができる。また、お話をきいたり、紙芝居その他聴視覚に訴えるものを通じて言語に関する興味と知識を得て、発達を促していく場合がある。

ところが、この集団生活をしている幼児たちは、家庭から離れて、はじめて幼稚園という社会集団に属したわけで、今後は小学校、中学校などの学校という社

会集団に、あるいはクラブにしろ近隣社会にしろ、長い人生の間には数え切れないほどの社会集団に接するのである。

そこではじめての社会集団生活である今の生活においても、おおいに言語が社会的な働きを持っているということを念頭において、そういう指導の基礎を築いていきたいと考えた。

劇あそびについて

私の現在うけている組は、三才児のときすでに一年間幼稚園生活を経験している。その中で、リズム劇あそびを経験した。

劇あそびの中にも、いろいろの形があるが、幼児期においては、身体を動かす劇あそびにはリズム的要素は、ひじょうに重要な位置を占めている。

劇あそびはもちろん、芸術や文学の価値の多少を問題にするものでなく、「一つの遊び」としてなされ、また扱っている。

いろいろ目標もあろうが、つぎのような指導面が含まれている。

・ 共同で一つの遊びをするための、社会

性の指導

・言語指導

・音楽と身体の動きの指導

・絵画製作の指導など

これらの指導は、一つずつ切り離しておこなえるものでもなし、みな同時におこなわなくてはならないという性質のものではないが、今回私は、社会性の指導、言語指導、音楽と身体の動きの指導を同時に考えていた。

このような目標を持ったが、やはり、実際の幼児の遊びと興味と発達状態などを教師はよくみて計画をたてる必要がある。

三年保育の冬に経験したリズム劇あそびは、秋に行われた年長組の劇あそびに刺激されて日常のごっこあそびに影響がみられたことは見逃せなかった。日常のリズム表現（ゆうぎ）を、やまとめた形にし、音楽と身体の動きの指導、社会性の指導の上によい機会であり、効果もあがったと思うが、それにもまして、幼児がこのようなことに、より興味を持つことがうかがわれて、喜ばしく思っ

た。こうして四才の組になったのであるが、今回は研究的な意味もあるので、特に劇あそびを扱うにあたって、最後の形を示すのではなく、劇あそびにいろいろな入り方があそぶうちの一つの過程を研究会当日に計画した。

劇あそびへの一過程

○お話をレコードの音楽と同時に聞き、登場するものを話し合い、表現して遊ぶ。

○表現しながら言語活動も促すよう誘導する。

当日は右の計画のもとに、「桃太郎」のお話をしたのであるが、まず、ここで幼児が友だちと一しょに話をきくという経験をさせる。その次に、登場したものを話し合う。さらに、自分のなりたい役をきめて、その意志表示をする。ここでも、幼児は言語に関係の深い、いくつかの要素を経験するのである。

桃太郎の希望者が五人いれば、五人の桃太郎が同時に表現動作する。あるいは、みんなで一つの役をやっているとおりに動作させ、いろいろな桃太郎ができる。

この間に、適当な音楽と教師の助言というものはぜひ必要であると思う。

このような形式ですると、一人一人に緊張の場面を持たせることがないので、人前にでると恥しいとか萎縮してしまう性質の幼児にはかなり入りやすい。

この研究会のときには、はじめすぐに入らない幼児がいたが、これはおおせいの会員の方の真中で、日常の保育をするのであるからここに常態と違ってくるのはいたしかたないと思う。今日に至るまでに、「舌切雀」「浦島太郎」のお話をし、今日と同様の導入法で遊ばせてきたので、緊張感を持たずに、おおせいの友だちと一しょに知らず知らずのうちに解けてこんで遊んでいたというように、いちおうの努力をしてきたつもりである。

また、いくら思っている表現法に困惑する幼児もいるであろう。そのために、リズム表現では、いろいろなものを経験させてきた。

そして、ここに教師から与えたものでなく、幼児の口から生れたことをさしはさむようにしていく。つまり、せりふ

を与えるのではなく、言語活動を促すように誘導するのである。一度にあまり計画を多く持つと、それは幼児たちに不可能になってくる。研究会当日には、ことは幼児たちが、途中適所にさしはさむ場面はほとんどなかったが、一度にそこまでは要求できない。「お話をきく。登場するものを話し合う。動作に表現する……」ここまでくると、幼児には興味の持続時間に限度のあることを考える。要求を高く多く持ち過ぎては逆効果になってしまうこともある。次の機会にもっていきなり、さらに多くことばの入るものは、年令的にもう少し後の時期に計画すればよい。

以上は、お話と音楽から入った場合であるが、このほかに紙芝居からも導入してみた。「ひよこの散歩」「あめふり」を実際に使用してみたが、題材をよく選択すれば、この方が視覚にも訴えるので登場するものがはっきり意識できるのか、話し合ひも発言が活発であるし、導入しやすいかも知れない。この場合は、教師が介在して、表現するときに紙芝居

の全枚数の中から場面をしばって表現しやすいうように、まとめることが必要である。

まだ、他の導入法もあると思うが、今回は、私の実際に試みたことについて記してきた。

言語指導といちがいについても、幼稚園生活においてはことに、その領域が固定されていない。私が、今回、言語に重点をおいた生活の中というはっきりした共通テーマから、こうした題材を選んだのも、四才児の初期という年令的条件を深く考慮して、結果としては、言語活動を直接的に促していない一見、リズム劇への導入ともみられたかも知れないが、ただ、ことば(せ

(五才児)

ラジオの聴取活動とその発展的あそび

村 石 京 子

一、聴取活動の教育的意義

まず問題となるのは、ラジオの聴取活動は、どのような教育的意義を持つかという

りふの意も含む)を劇あそびの中で重視して考えるのではなく、人の話を聞いたり、話しあったり、考えたり、発表したり、という言語活動の広範囲な面の指導が重要な点であると考えたからである。

はじめにも述べたのであるが、社会的な働きを持つ言語は、個人で持っている語いとか、ことばの価値以外に、人との接触である社会において価値を發揮するものではなくてはならない。言語指導であっても、友だちといっしょの場面においても発表すべきときには発表できるように、いろいろな場面から考慮したい。結局は、幼児の心理をよく理解し、心理面からの解決や指導も一方では頭においておくことが必要であるといえよう。

点である。小学校では、学習指導の中に視聴覚教材としてラジオを広くとり入れていり、幼稚園でもところによってはかなり